

真夜中のソテツ

瀬戸内町立秋徳小学校 四年 濱田 琉陽

「わあっ、大きいバツタだあ。」

「そこそこっ、つかまえて。」

公平は家のうらのソテツ畑で、友達と虫とりをする
ことが大好きです。ソテツ畑の中はチクチクしていた
いから、大人が入ってこないのです。公平たちにとっ
ては、ぜっこうの虫とりスポットなのです。公平たち
は、毎日、日がしずみ始めるころまで遊んでいました。

その日は、風のふいていない、とても暑い日でした。
友達のまいちゃんは、いつもより早く家に帰ったけど、
公平はきのうとり逃がした大きなバツタを見つけた
ので、ソテツ畑のおくの方まで、む中になって追いか
けていきました。そのバツタは小さなソテツの葉の上
にじっとしています。公平はゆっくりゆっくり近づき
ました。太陽は、山の上にかかり、しずみ始めていま
す。

「ようし、逃げるなよ。」

公平は、そうっとバツタに近づきました。公平の手が
バツタをつつもうとしたとき、

「ガサガサ。」

風もないのに、小さなソテツが動いたのです。

「ハブだあ。」

公平は、後ろの方にピヨーンと飛びのきました。

「おいおい、ちがうよ。ハブじゃないよ。」

キンキンした声が聞こえました。

「ケンムンかあ。どこにいるんだ。」

公平は泣きそうになってさげびました。

「おいおい、ボクはここだよ。君の足元を見てごら
ん。」

キンキン声かそう言っています。公平の足元には、手
足のはえた、どんぐり目玉の小さなソテツがおどつて
いました。そう、そのすがたは、リオのカーニバルで
サンバをおどるお姉さんたちによくにっていました。

「やあ、君は虫とり好きな公平君だね。ぼくはツンツ
ンだよ。」

「ねえ、何でぼくのこと知ってるの？どうして君はし
やべれるの？」

「人間だけがしゃべれるなんて思ったら大まちがい
さ。ソテツにはソテツの時間があるんだ。その時間
は、しゃべられるし、動ける。人間が知らないだけ
さ。」

「え、今はソテツの時間ってこと？」

公平はびっくりして聞きました。

「ソテツの時間はまん月の夜の十二時から十二時まで。その間にソテツの時間が生まれるのさ。」

「十二時から十二時まででってどういうこと？」

「つまり、まん月の夜、十二時になると、人間の時間は止まり、ソテツが動く自由な時間が始まるってこと。」

ツンツンはうれしそうに言いました。

「じゃあ、何で君は動いてるの？」

公平がそう聞くと、ツンツンはしんけんな顔をして話し始めました。

「長ろうやたくさんのソテツの仲間が、ぼくに願いをかけたんだ。」

「どんな願いなの？」

「公平君と会って、たのみごとをしてほしいって。」

「たのみごとって何？」

ツンツンは熱心に話し始めました。

「このソテツ畑の持ち主が、ボクたちソテツを全部売るって言い出したんだ。このままじゃぼくたち家族はバラバラになってしまふんだ。持ち主にお願いたいけど、なかなかここへは来てくれない。だから、いつもここで虫とりをしている君に、ソテツを売らないように持ち主にたのんでほしいのさ。」

「そんなこと、ぼくにできるかなあ。それにこの持

ち主なんて知らないし……。」

公平は心配そうに言いました。

「きのうトラックが来て、作業着のおじさんが話してたんだ。来週からボクたちをほり出して、売り始めるつもりなんだ。」

「そのおじさんが持ち主なの？」

「ううん、ちがうよ。持ち主は大金持ちのおばさんらしいよ。その人も小さいころは、ここでよく虫とりをしてたって父ちゃんが言ってた。」

「ええつ、そんな人が君たちを売ろうなんて思うのかなあ？ぼくならぜったいにそんなことはしないよ。」

「人間は、大人になれば変わるって父ちゃんが言ってた。だから君にたのみたいんだ。」

ツンツンは、ちよっぴりしよんぼりした声で言いました。

「分かった。ぼくやってみるよ。」

「ありがとう。ボクは、このソテツ畑の外には出られないんだ。君が引き受けてくれて、ボクの仲間たちもよろこんでいるよ。」

公平はツンツンに見送られてソテツ畑を出ました。ふり向くと、入口の方に小さなソテツがありました。ツンツン、きつといい知らせを持ってくるよ。」

公平はひとり言のようにつぶやきました。

次の日、公平がソテツ畑に行くと、トラックが止まっていた。作業着すがたのおじさんが、ソテツを見ている。

「ソテツをほりにきたのかなあ。」

公平は心配になって、そのおじさんに話しかけました。

「ほるのは来週からさ。今日はソテツを見に来たんだ。」

おじさんは、何だかさびしそうです。

「おれが子どもころは、よくここで虫とりをしたものさ。おれもみよちゃんもここが大好きだったんだ。それなのに何だかって……。」

おじさんは言葉をつまらせました。

「ねえ、おじさん、この畑の持ち主ってだれなの？」

「みよ……いやいや、白雪さんって人さ。この町一番のお金持ちさ。」

白雪さんといえば、まいちゃんの家近くの大きなおやしきに住んでいるおばさんです。

「でも、何でそんなこと聞くんのだ。」

「おじさん、この畑のことが好きなんですよ。だってらぼくの話すことがきくと分かるはずさ。」

公平はしんけんな顔で、きのうのできごとをおじさんに話し始めました。

「君の見たソテツって、このくらいの大きさじゃなかったか？」

おじさんは、こうふんしたような声で言いました。

「そうですけど……。」

「名前はピンピンって言わなかったか。」

「ぼくの会ったソテツは、ツンツンって言ってたけど……。」

おじさんの顔はもうわらっていました。

「おれも子どもころ、動くソテツに会ったことがあるんだ。やっぱりあれはゆめじゃなかったんだな。」

おれとみよちゃんが見たのは、動くソテツだったんだ。」

「みよちゃんってだれですか？」

「白雪みよ子。この畑の持ち主だ。」

「おじさん、ぼく、ソテツたちにたのまれたことがあるんです。」

公平は、おじさんに、ソテツたちがこれからみんなていつしよにくらしたいと思っっていることを、一生けんめい話しました。

「だから、白雪さんと会って、ソテツを売らないようにたのみたいんです。」

おじさんは、ちよっぴりざんねんそうな顔になりました。

「うーん、今のみよちゃんは、そうかんたんには考えを変えないんだ。ざんねんだけど、あきらめたほうがいいかもなあ。」

公平は必死になって言いました。

「おじさんも、だれかに家族をバラバラにされたいやでしょう。ソテツだつてきつと同じだ。だからぼくのところにツンツンはやってきたんだ。白雪さんに話をさせてください。」

「でもね、みよちゃんは信じるかなあ。」

そのとき、公平にとびつきりいいアイデアがうかびました。

「おじさん、明日のばんは、まん月ですよね？」

「ああ、そうだな。それがどうかしたかい？」

「まん月のばん、夜中の十二時になると、ソテツの間が始まるんです。」

「ソテツの間って何だ？」

「この畑のソテツが、動いたり、しゃべったり、おどつたりするんです。その様子を白雪さんに見せたら、きつと分かってくれると思うんですけど……。」

おじさんは、ソテツ畑を見ながら何か考えていましたが、急に明るい顔になってこう言いました。

「よし、分かった。おれがみよちゃんを、どうにかして連れてきてやるよ。明日の夜中の十二時にここに

来ればいいんだろう。」

公平はうれしくなつてとび上がりました。

おじさんは、トラックに乗って、白雪さんの家の方向へ走って行きました。

「公平くん、やったね。」

公平の足元には、いつの間にかツンツンがいました。

「明日のばんは、まん月だ。ぼくたちソテツのすてきな時間に、君たちをしようたいするよ。」

ツンツンのキンキン声がひびきました。

次の日の真夜中、公平はそつと家をぬけ出しました。だれにも見られないようにこっそりと。かいちゆう電とうも持つていなかっただけど、足元はまん月の光でてらされていきます。

ソテツ畑の前に、トラックが止まり、あのおじさんと、白い服を着たおばさんが立っています。

「こ、こんばんわあ。」

公平は、ちよつときんちようしながらあいさつをしました。おばさんは、何も言わずに公平をジロジロ見ています。おじさんは、公平にウインクしました。

「いつたい何を見せてくれるの？」

おばさんがおこりながらそう言った時、月の光がだんだん強くなり、ソテツ畑をてらし始めました。急にさわがしくなり、たいこやふえの音が聞こえ始めまし

た。これはサンバのリズムです。

「何、これ……。」

白雪さんも、おじさんも、そして公平も口をあんぐりと開けて見ていました。

「イツツ、ショータイム。」

ツンツンのキンキン声が出て、たくさんソテツたちがいつせいにodorい出しました。テレビで見るサンバのodorいよりも、もつとハデで、ノリノリです。公平も、おじさんも、白雪さんも、知らないうちにおodorい出していました。三人とも楽しくてたまりません。とびっきりのえ顔です。

「ソテツ畑は楽しい楽しい。」

「サンバのリズムはハッピーハッピー。」

ソテツたちのうたがひびきわたり、公平とおじさんと、白雪さんは、ソテツたちといっしょに長いことおどっていました。

気がつくくと、三人はしずかな真夜中のソテツ畑の中に立っていました。

「たっちゃん、あなたがわたしに見せたかったのは、

これだったの？」

「いやいや、この子がソテツたちにたのまれたんだよ。家族がバラバラになるのはいやだって言ってたそ

白雪さんは、しばらく考えて、それからにっこり笑って言いました。

「わたし、この畑のソテツを売るのはやめるわ。本当は、わたしもこのソテツが大好きなのよ。売ってくれってたのまれた人には、ことわるわ。」

「おばさん、ありがとう。」

公平はうれしくなって、つついサンバをおどってしまいました。

白雪さんとおじさんがトラックに乗って帰ると、公平の足元でキンキン声がありました。

「公平くん、ありがとう。君のおかげだよ。」

「ツンツン、君は前にもあのおじさんたちに会ったことがあるの？でも、名前はピンピンって言ってたけど……。」

「フフツツ、それはボクの父ちゃんだよ。ボクたちの時間にあの二人が来ることができたのは、父ちゃんのおかげなのさ。」

公平はツンツンに手をふるると、月夜の道を家に向かって歩き始めました。

時計の針はまだ十二時をさしたままでした。